

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2025年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			スポーツウエルネス学専攻
研究代表者 (2026年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名	
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 1 年		種谷 大輝	
指導教員	所属部局・職名		氏名	
	スポーツウエルネス学部・教授		松尾 哲矢	
自然・人文・社会の別	自然	・ 人文	・ 社会	個人・共同の別
				個人・共同
研究課題	運動部活動指導者の補欠選手に対する指導のアンビバレンスに関する研究			
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名	
研究期間	2025 年度			
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 98,544 円 / (採択金額) 100,000 円			

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。
スポーツ活動において試合に出場できない「補欠部員」が存在する。日本の学校運動部活動システムを背景として、補欠部員は、試合に出場するために練習に励まなければならない一方で、応援活動や雑用などのサポートの役割のため、練習機会が阻害されてしまう。その結果、補欠部員は多様なアンビバレンスを抱え込んでしまうと考えられている。本研究では、運動部指導者が補欠部員のアンビバレンスをどのように認識しており、それに対してどのように対応し、指導を行っているのか検討していくことを目的とした。その上で、指導者の指導によってどのように補欠部員のアンビバレンスが生じていくのか検討を行った。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[ダブル・バインド] [社会的相互作用] [アノミー]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- ・自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

(問題意識)

本研究では、日本の運動部活動においてスポーツ活動に対する参加機会の平等性は担保されているが、補欠部員のプレー機会の平等性が担保されていない状況に対し、問題意識を持ち、検討を行った。中澤(2022)が特に中学校運動部活動において過度な競争を生む勝利至上主義の弊害が看過できないと指摘しているように、補欠部員の問題が中学校運動部において象徴的に見られると考え、中学校運動部を対象とし検討した。

本研究では、指導者が補欠部員の置かれた状況をどのように捉えているのか分析するとともに、補欠部員がなぜそのような状況に置かれざるを得ないのかについて指導者の補欠部員指導をめぐる様相に着目し分析を行った。

(先行研究の検討及び本研究の目的)

補欠部員の置かれた状況について山本(1990)は、補欠部員は、「何が何でもやめたくない」という固執動機によって運動部活動に参加していると指摘した。山本の指摘により、補欠部員は消極的な動機によって運動部活動に参加していることが示唆された。一方で、山崎・鈴木(2015)は、補欠部員が運動部活動に積極的に関わり続けていると捉え、補欠部員は、応援活動や仲間の支援活動に運動部活動の面白さを見出していることが示唆された。また、横田(2002)や福井・豊田(2020)の指摘から、補欠部員は肯定的な価値意識と否定的な価値意識を同時に抱え込みながら運動部活動に参加していることが示唆され、横田は、この複雑な参加動機が生じる背景には杉本(1986)の指摘するアンビバレンスの存在があると指摘した。

杉本(1986)は、中高運動部活動が体育集団としての性格とスポーツ集団としての性格の両価性(アンビバレンス)を抱え込んでいる点に着目し、相反する価値意識を抱え込んでいる状況に対し、部員がどのように関与したら良いか判断に困惑し悩む状態を Merton の「社会学的アンビバレンス」の概念を用いて検討した。その結果、中高生の運動部員が部活動を継続する上で、教育的価値に関するアンビバレンスを継続的に有していることや、指導者とのコミュニケーションの閉塞によりアンビバレンスの状況が深刻化していることを指摘した。杉本の議論から、運動部員のアンビバレンスは、運動部指導者の考え方や指導意識に深く関わるものと考えられる。

そこで、指導者の指導意識に着目した研究について検討すると、Locke and Massengale(1978)やFigone(1994)の研究が見られ、指導者自身も教員(Teacher)役割とコーチ(coach)役割を二重に担うことで、役割葛藤を抱え、選手に悪影響を及ぼすことが示唆された。

本研究では、中学校運動部活動指導者が補欠部員のアンビバレンスをどのように認識しており、それに対してどのように対応し指導を行っているのか検討していくことを目的とした。その上で、指導者の指導によってどのように補欠部員のアンビバレンスが生じていくのか検討を行った。

(理論的視座)

本研究における理論的視座として、アンビバレンスの概念を参照した。アンビバレンスとは、一般的に、「同一の対象に対して相反する傾向・態度・感情が同時に存在する精神状態(架場 1981:25)を指し、元々Vleuler(1910)を中心に心理学的に扱われてきた。その後、Merton(1969)はアンビバレンスが文化構造や社会構造に由来するものとして、社会学的な視点からアンビバレンスを捉えてきた。本研究では、指導者や補欠部員の抱えるアンビバレンスがいかなる構造上の要因によって生起しているのか把握する上で Merton の社会学的アンビバレンス論を参照した。

アンビバレンスの概念を用いることの有用性について大村(1988)は、今までの社会学で慣用される葛藤理論にはマルクス主義を核としたイデオロギー的な含みがあると指摘した上で、「我々は、片方が他方を抑圧しているというだけでなく『結合』と『闘争』や『支配』が相互に他を正当化し、補強し合っている状況を是非とも明確にしなければならない(大村, 1988:137)と述べており、Merton(1969)の社会学的アンビバレンス論やBatoson(2000)のダブル・バインド論に着目する有用性について示唆している。本研究では、補欠部員の抱える葛藤を指導者からの抑圧としてのみ捉えるのではなく、指導者と補欠部員が結合関係を結べば結ぶほど多様な規範的期待が生じ、逃れられない葛藤として立ち現れてくるような様相も視野に入れる上で、アンビバレンスの概念に着目をした。

一方で、社会学的アンビバレンスの概念のみでは、構造に対する個人の能動性や主体性に迫れていないため、架場(1981)の状況的アンビバレンス論やBateson(2000)のダブル・バインド論を参照することで社会学的アンビバレンスの課題を補完した。

研究成果の概要 (つづき)

本研究では、元来 Vleuler を中心に心理学的に扱われてきたアンビバレンスの理論を補完する上で、Merton の社会学的アンビバレンスの視点や、シンボリック相互作用論に立脚した状況的アンビバレンス及びダブル・バインドの多角的な視点からアンビバレンスを捉えた。つまり、単にアンビバレンスを心理的な状態として捉えるのではなく、指導者や補欠部員としての地位・役割・行動規範や運動部活動の持つ制度的側面、指導者や補欠部員の相互作用によって生じるものとして捉えていった。

(調査概要)

本研究における調査対象者は公立中学校で運動部活動指導を行う教員 10 名を対象とした。調査協力者の選定に当たっては、全国中学校体育大会で実施されている全ての球技大会種目(9 種目)について今年度及び前年度で顧問として指導経験のある教員を対象として選定を行った。調査方法は半構造化インタビューを用い、1 人あたり約 60 分聞き取りを実施した。主な質問項目は、「基本的属性」、「補欠部員のアンビバレンスに対する認識」について質問をし、中学校運動部指導者が補欠部員に対するアンビバレンスをどのように認識し、それが、指導者の指導行動とどのように関係しているのかを探索的に聞き取りを行った。インタビュー調査の実施に当たっては、立教大学スポーツウエルネス学部・研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:SP025006N)。分析に当たっては、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析を進めた(木下, 2020)

(調査結果及び考察)

M-GTA による分析の結果 13 個の概念が抽出された。それらの概念から、カテゴリー①良かれと思い無意図的に生じるアンビバレンス、カテゴリー②構造上の矛盾による曖昧な指導で生じるアンビバレンス、カテゴリー③秩序維持のため意図的に生じるアンビバレンスの 3 つのカテゴリーが生成された。

生成されたカテゴリー間の構造的関係性について考察すると、中学校運動部は義務教育であり、全員に平等に運動部活動に参加する権利が与えられており、教師は部員全員に教育的価値を付与しようとしていく。一方で、大会制度上の問題や、保護者や他の顧問教員から課される期待により、勝利をしなければならないという規範を有していく。その結果、レギュラーと補欠部員という差異化が生じ、プレー機会の差が生じていく。良い教師であろうとするほど、教師自身も様々な矛盾する規範に過剰に 대응しようとし、良かれと思い行った教育活動により、補欠部員に対し、無意図的にアンビバレンスが生じていくことが示唆された。また、運動部活動は、3 年間という時間的制約の中で勝利を目指していかなければならないため、補欠部員に対して状況によって流動的に変化する多様な規範的期待が課されることが示唆された。さらに、指導者自身、アンビバレンスに気づいてはいるものの適切な指導ができず曖昧な指導となってしまう、補欠部員に対し矛盾する規範的期待が生じたり、指導者自身抱えているアンビバレンスに対し、対処するために意図的に補欠部員にアンビバレンスが仕掛けられてしまったりといった様相も看取された。さらに、指導者は部活動の秩序を維持するため、アンビバレンスを意図的に仕掛けていくが、それによって入部者の減少や退部の増加、指導者とのコミュニケーションの閉塞といったように、秩序維持に繋がらなくなった場合は、指導者は自己反省をし、アンビバレントに対応しながら新たな指導のあり方を模索していく様相が見られた。

(本研究により何をどこまで明らかにできたのか・できなかったのか)

本研究によって、中学校運動部指導者が補欠部員のアンビバレンスをどのように認識しており、それに対してどのように対応し指導を行っているのか検討した上で、指導者の指導によってどのように補欠部員のアンビバレンスが生じていくのかについて一定程度明らかにすることができた。一方で、補欠部員がどのようなアンビバレンスを実際に抱えているのかについては明らかにできていないため、今後、補欠部員に対する調査を実施する必要がある。

(何をもって研究成果を達成できた・できなかったと考えられるのか)

運動部活動指導者の補欠部員に対する指導上のアンビバレンスについて、公立中学校運動部活動という場において大きく 3 つの種類のアンビバレンスが生じていることを明らかにした点が本研究の成果として達成できた点である。一方、本研究は、中学校運動部という限定された範囲内における研究であるため、今後は、私立の学校や高等学校においてどのようなアンビバレンスが生じているのか明らかにしていく必要があると考えられる。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください (紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

- ① 種谷大輝 (2026) 運動部活動における補欠部員のアンビバレンスに関する一考察: 社会学及び教育学における視点から. 立教大学スポーツウエルネス学部研究紀要, 3:15-26.
- ④ 種谷大輝・松尾哲矢 (2025) 中学校運動部における補欠部員のアンビバレンスに関する実証的研究: 指導者の補欠部員への指導に着目して (日本体育・スポーツ・健康学会第 75 回大会、令和 7 年 8 月 29 日、日本体育大学)